

生活介護事業を利用する知的障害者に対するアセスメント実施の一事例

—— TTAP(TEACCH Transition Assessment Profile)を活用して ——

尾 関 美 和*, 田 中 和 也**

(キーワード: TTAP, 包括的アセスメント, 支援計画, 情報交換)

I. はじめに

厚生労働省職業安定局高齢・障害者雇用対策部障害者雇用対策課が2019年に一部改正して公布した障害者対策基本方針(2019)は、障害者の雇用の促進及びその職業の安定を図ることを目的とするものである。障害の種類別の配慮事項の(2)知的障害者において、「十分な指導と訓練を重ねることにより、障害のない人と同様に働くことができることを考慮し、知的障害者の職業能力の向上に配慮する。」や、「日常的な相談の実施により心身の状態を把握するとともに、雇用の継続のためには家族等の生活に関わる者の協力が重要である(一部抜粋)。」ことが述べられている。同様に、「関係機関との連携等」では、「特に、知的障害者や精神障害者は、職場環境を始めとする環境の変化による影響を受けやすいこと、地域における社会生活面での配慮が不可欠であること等から、地域レベルにおいて、地方公共団体、社会福祉法人、民間部門との連携を図りつつ、生活全般における支援を行うこととする」ということも述べられている。

自己点検チェックのための生活介護事業ガイドライン案(2019)においては、サービス管理責任者向けガイドラインの中に「モニタリングにより、個別支援計画の必要性が判断された場合には、個別支援計画の積極的な見直しを行う」ことが挙げられている。また、「生活介護事業所が所在する地域において、自治会、商店、学校や、地域住民、ボランティアなど、さまざまな人や機関、団体等との関係性を構築することが望ましい」ことも指摘されている。

また、障害者就業・生活支援センターによる就労アセスメントを活用した障害者の就労支援マニュアル(2015)には、「就労アセスメント結果はサービス利用開始後も、モニタリング・個別支援計画の見直し等の機会を通じて、継続的に追加・更新していくことにより、利用者の就労能力の向上やライフサイクルに合わせた必要な支援を実現していくために役立つ」とも述べられている。さらに、「サービス利用開始後も継続的に就労アセスメント結果が追加・更新され、活用されることも重要」であることが挙げられている。

しかしながら、都道府県・政令指定都市・中核市における生活介護・就労継続支援B型事業所の評価についての実態調査(2019)によると、地域から寄せられている苦情や課題の中でも、全国の生活介護、就労継続支援B型に共通して障害特性に合わせた支援が課題となっていることが分かった。特に、生活介護事業においては、「個別支援計画に基づいたサービスが行えていない」ことや、「支援員の入れ替わりが激しい」という地域からの苦情もあったことが報告されている。実際にT県にある事業所関係者の話からも、個別支援計画の共通理解と職員の入替わりの激しさは事業所を運営していく上で大きな課題であることが分かった。

以上のような現状があることから、就労後においても視覚的指示(絵や文字等)の注目の仕方や解釈の特性、意思伝達の表現等に応じ、且つ職業能力の向上及びライフサイクルに合わせた指導・支援の実現、家族等の関係者との連携を促すための包括的なアセスメントが必要になることが分かる。

本研究では、様々な障害特性に配慮し、生活能力向上のため個に見合った活動と支援の提供が求められる生活介護事業を利用する知的障害者の診断を受けた青年を対象に、TTAPを実施し、明らかになった実態を、福祉事業者へ情報提供を行うことを目的とした。就労後数年が経過し、生産活動や余暇活動にも慣れてきた中で、さらなる指導・支援の充実のための課題の整理と目標の立案を図るために、現在の作業活動能力や家庭及び事業所での実態を把握でき、特性や長所を取り入れた検査であるTTAPを活用する。就労後の知的障害者をアセスメント

*鳴門教育大学教職大学院子ども発達支援コース

**鳴門教育大学教職大学院 学校教育研究科 子ども発達支援コース

し、アセスメント結果や参与観察における関係者と情報共有及び目標の設定を行うこととする。

Ⅱ. TTAP(TEACCH Transition Assessment Profile)とは

TTAPは、AAPEPの改訂版である。青年・成人心理教育プロフィール(AAPEP; Adolescent and Adult Psycho-Educational Profile)は、ゲリー・メジボブ、エリック・ショプラー、ブルース・シェーファー、ローダ・ランドラスによって開発された。彼らの意図は、自閉症スペクトラム障害の子どもたちが可能な限り、家庭や地域で自立した生活を送るために、現在の能力とその可能性を評価するための検査法を作成することであった(ゲリー、ジョン、S.マイケル、エリック 2010)。その後、自閉症スペクトラム障害の早期発見、早期対応、アメリカの障害関連の法制度の発展と教育に研究者の注意が集まっていることに対応することを意図して作成され、TEACCH移行アセスメントプロフィール(TTAP)と呼ばれている。この検査法は、自閉症スペクトラム障害や関連する発達障害のある年長の子どもや青年を念頭において開発されているが、成人のアセスメントや目標設定においても有効である(ゲリー、ジョン、S.マイケル、エリック、2010)。

TTAPには、次の6つの特徴がある。1つ目は、直接観察尺度、家庭尺度、学校／事業所尺度の3つの尺度を設けていることである。これは、対象者の特性を考慮し、家庭と学校や職場にも焦点を当てることにより、効果的なアセスメントを目指すためである。2つ目は、広範囲の生活課題を明確にするために、6つの生活課題の機能領域に焦点を当てており、①職業スキル②職業行動③自立行動④余暇スキル⑤機能的コミュニケーション⑥対人行動の6つの領域が設定されているということである。各領域に12項目、6つの領域で合計72項目、3尺度で合計216項目となっている。3つ目は、3つの異なった環境条件の中でのアセスメント(直接観察尺度、家庭尺度、学校／事業所尺度)を行うことである。4つ目は、「合格」「不合格」「芽生え」の3つの基準から1つを選んで採点をするという独自の採点システムが挙げられる。「合格」は、課題がうまく達成した場合に採点する。「不合格」は課題に取り組もうとしなかったり、取り組んでも課題が達成できなかつたりした場合に採点する。「芽生え」は課題を部分的に達成できたり、達成方法について初歩的な理解を示していたりする場合に採点するものである。この採点法とその採点結果は対象者の就労移行や就労継続のために必要な機能的スキルレベルの把握や課題、また環境調整についての情報も得ることができる。5つ目は、独自の採点システムから得られた情報による「構造化についての提案例」である。6つ目は、自閉症スペクトラム障害児・者が自分の好みを見いだすことができるということである。このように自閉症スペクトラム障害のある児童から成人を対象に、地域社会の中でよりよく適応するための多くの情報提供が期待できる就労移行のためのアセスメントツールである。さらに梅永ら(2014)は、TTAPは自閉症があるかないかにかかわらず、中度から重度の知的障害のある障害者へのアセスメントにも適していると述べている。主要な就労をしていく上での目標を見出し、対象者の特性や強みを明確にし、家族と事業所関係者間の連携を促すためのツールとして役割を果たすことができるものである。本検査の大きな特徴である直接観察尺度、家庭尺度、学校／事業所尺度の3つの尺度を設けたことで、TTAPは、ハードスキル(作業スキルであり、具体的には清掃、食器洗い、学歴や資格等)である職業スキルはもちろん、就労場面や生活全体で求められる広範囲のスキルについても、包括的にアセスメントできる特徴がある。

Ⅲ. 方法

1. 研究対象者の特性

生活介護事業所を利用するAさん、男性、2X歳、知的障害、療育手帳A1。3歳から地域の私立幼稚園に通い、小学校では知的障害特別支援学級に在籍。その後、知的特別支援学校中学部・高等部に在籍し、卒業後自宅から通所型生活介護事業所に通う。口頭での意思表示はなく、身振りで応えることができる。短く簡単な言葉は理解できており、素直に従う。対人トラブルはほとんどなく、こちらからの発信に穏やかに応える姿が見られた。一日の生活は自宅から送迎バスで事業所へ通い、ボールペン組み立てやもぎりの仕事をしている。慣れた活動であっても視線で確認を求めることがあり、促しがないと固まってしまうこともある。部屋移動においては自分から移動することができているものの、席にある椅子を引いた状態で止まり、促しの指示があるまで待っていることもある。休憩時間は大好きな本をめくったり、ハンドスピナーで遊んだりして過ごす。休日は、外出が好きで保護者と買い物に行ったり、遠出をしたりしている。

2. 倫理的配慮

個人情報を取り扱うため、保護者と事業所責任者へ事前に説明を行い、聞き取り調査時に個人が特定されないように配慮することで実施の許可を得た。

3. 手続き

20XX年1月から8月までの期間でアセスメントと支援計画の提案を行った。直接観察尺度においては、第2筆者（公認心理師）が、静かな環境の中で保護者別室待機（ワンウェイミラー越しに見学）のもと、約120分間実施した。家庭尺度においては、保護者（母親）に聞き取りを行った。事業所尺度においては、事業所内で施設責任者とAさん担当者の2名から聞き取り調査を行った。

まずは、家庭尺度の調査の際に行ったインタビュー面接の結果（図1）の情報整理を行う。次に、実施した上記の3つの異なった環境条件から得られた情報を基に、6つの機能領域3尺度ごとに比較できる検査プロフィール、6領域ごとに比較できるスキル平均値、尺度ごとに比較できる尺度平均値の作成を行う。次に、直接観察尺度の結果から得られた構造化の要素を整理し、どのような環境調整が適切か分析する。さらに、検査の様子と6つの機能領域ごとの獲得できているスキルや芽生えているスキルについて整理する。以上のような分析結果から、対象者の実態から見られる各領域の目標の分析を行う。

後日、保護者と事業所それぞれにアセスメント結果を伝えるためのミーティングを行う。検査で得られた情報と日常生活での様子を情報交換し、各環境で課題と支援方法について協議する。さらに、事業所においては2日間、制作活動や余暇活動の観察を行い、明らかになった課題と支援方法がどのような場面で実施できるかを事業所関係者と共に探る。

TTAPの結果について(アセスメントシート①)

所属	〇〇事業所	年齢	2×歳	性別	男	記録日	20××.1.25
A. 主訴 活動に確認を求め。							
B. 家族構成		C-2. 教育歴・相談歴		D. 家庭・学校・職場の様子			
祖父、祖母、父、母		3歳 ○〇幼稚園 7歳 ○〇小学校 13歳 ○〇特別支援学校 中学部・高等部		*作業所では8時30分から17時まで時間いっぱい働けることができている。作業中、きちんとできているか不安で支援者の視線を気にしている。作業は主にぎざりやボールペン組み立てを行っている。 *たんずの服がはみ出ていると指摘をして伝える。 *ゴミがゴミ箱に入らず下に落ちると怒る。			
C-1. 生育歴							
4歳 知的障害、療育手帳A1 てんかん							
S-M社会生活能力検査(20××.7.9 ○〇大学) SQ:21 SA:2-9							
E. 学習面 テレビの英会話番組で、「Whats are you doing?」の台詞(音の響き)に何度も笑うことがあった。							
F. 行動・社会性 *小学校時代、移動教室のときに何かか気になり動けなくなってしまった。同級生が腕を引っ張って一緒に行動した。 *気持ちの切り替えはスムーズ。 *小さい子は苦手。							
G. 運動・感覚・健康 *本めくりが好きで、分厚い本をめくるのが特に好きである。 *音楽に合わせてジャンプする。							
H. 身辺処理・生活習慣 知らない場所でも、支援者と一緒に小便ができる。		I. 興味・関心等 *本めくり *車に乗って旅行へ行く。 *動物園 *水族館 *丸いキャラクターのぬいぐるみ		J. 支援体制			

図1 インタビュー面接の結果

IV. 結果と解釈

1. フォーマルアセスメントの結果

フォーマルアセスメントとは、直接観察、家庭、事業所の3つの環境条件下で行う検査である。以下、フォーマルアセスメントの得点プロフィールを図2、スキル平均プロフィールを図3、尺度平均プロフィールを図4、に示す。

	職業スキル			職業行動			自立機能			余暇スキル			機能的コミュニケーション			対人行動		
	直接	家庭	事業所	直接	家庭	事業所	直接	家庭	事業所	直接	家庭	事業所	直接	家庭	事業所	直接	家庭	事業所
12																		
11																		
10																		
9																		
8																		
7																		
6																		
5																		
4																		
3																		
2																		
1																		
合格	4	2	2	9	6	7	2	1	2	3	2	4	3	1	3	7	6	7
芽生え	3	5	3	2	3	4	2	3	6	3	4	4	3	4	4	4	3	3

図2 得点プロフィール

	職業スキル	職業行動	自立機能	余暇スキル	機能的コミュニケーション	対人行動
12						
11						
10						
9						
8						
7						
6						
5						
4						
3						
2						
1						
合格	3	7	2	3	2	6
芽生え	4	3	4	4	4	3

図3 スキル平均プロフィール

	直接	家庭	事業所
12			
11			
10			
9			
8			
7			
6			
5			
4			
3			
2			
1			
合格	5	3	4
芽生え	3	4	4

図4 尺度平均プロフィール

(1) 得点プロフィールについて

得点プロフィール(図2)と領域別スキル獲得結果(図5)から合格が芽生えより若干多い結果と言える。また、同じ領域でもアセスメントの尺度が異なると大きな差が生じている。「自立機能」では、事業所尺度では合格と芽生えを合わせて8となっているのに対し、直接観察と家庭尺度では4となっている(図2参照)。

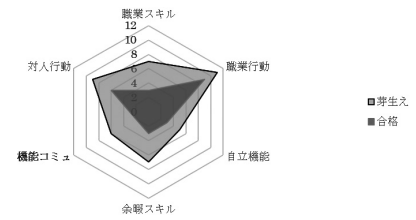


図5 領域別スキル獲得結果

(2) スキル平均プロフィール(図3)について

「職業行動」「対人行動」の得点が高いのに対し、「自立機能」「機能的コミュニケーション」は低くなっている。今後の支援において家庭や事業所で活用できるスキルとして重要な点は、獲得済みのスキルは場所が変わっても発揮できること、具体物やカードの弁別ができること、作業の完了報告が芽生えていることが挙げられる。今後は、視覚的指示によるツールを用いながら、日課の確認、余暇活動の選択、トイレの要求等を重点的に支援していく必要性が明確になった。

(3) 尺度平均プロフィール(図4)について

尺度間の比較では、直接観察尺度=事業所尺度>家庭尺度となった。直接観察尺度では、すべきことが明確であったため、課題遂行や、お茶を要求するコミュニケーションスキルが発揮しやすかったことが視察される。同様に事業所という集団生活の環境の中でも、毎日の日課がある程度固定されていることとAさん担当者の最小の支援によって、日常生活動作のスキル発揮や、余暇の充実につながったと思われる。

(4) 構造化による支援方法についての提案(図6)

直接観察尺度の結果から、Aさんに「有効と考えられる構造化」による支援方法を整理した。Aさんが様々な場面でスキルを獲得していくための視覚的な手がかりとして、色やイラストの活用が有効であることが分かった。ただし、色の識別能力が非常に高い可能性があり、具体物と視覚的指示のイラストのわずかな色の違いで同一のものであると認識できなくなる可能性があるため、色の使用は注意が必要である。ワークシステムによって、求められている課題や次にすべきことを理解している様子から、「何を」「どのくらい」「どうなったら終わりか」の情報を示すことで、課題に自ら取り組み、継続して活動できると考える。

また、構造化されていない環境においては言語や身振りによる指示待ちが多くなり、課題に取り組みなかつたり、次の活動への移行が困難になったりすることが考えられる。構造化された環境を整えることで自立度が高まり、活動の取り組みや場所移動、余暇の選択等、主体的に取り組める可能性があることも分かった。

構造化の要素	直接観察尺度から抽出した項目	達成レベル		
		合格 P	芽生え E	不合格 F
スケジュール	項目36 スケジュールに従う ※4 文字		✓	
ワークシステム	項目5 数字カードの分類と重ね合わせ	✓		
	項目7 旅行キットのバックジニング		✓	
	項目46 余暇活動への要求とワークシステムへの反応		✓	
視覚的支持	項目38 休憩時間が終わった後、道真を片付ける	✓		
	項目72 視覚的ルールに従う	✓		
	項目11 カップとスプーンによる軽量			✓
文字による指示	項目88 文字による指示に従う			✓
	項目72 視覚的ルールに従う	✓		
視覚的組織化	項目4 色カードのマッチング	✓		
	項目7 旅行キットのバックジニング		✓	
視覚的明確化	項目35 請求内容を計算する			✓
	項目43 カウンターを使って運びの距離の数字を理解する		✓	
	項目48 地域での余暇活動に必要なお金の計算			✓

図6 構造化による支援方法についての提案

2. 解釈

それぞれの行動観察における領域別の結果(表1)と、本検査の結果から「分析フォーム」(表2)を作成し、課題の整理と、領域別の指導目標の検討を行った。

表1 行動観察における領域別の結果

機能領域	検査の様子
検査の様子	検査内容における指示は、言語指示から実施。言語指示のみでは、指示内容の理解がうまくいかず、活動が進まない姿が見られたため、それ以降はモデルを示した状態で作業内容を伝えました。それぞれ6領域別に見られた結果を下記に示します。
職業スキル	検査項目3のナットとボルトの絵の指示については見落としが見られ、視覚指示理解の促しと注意深さに欠ける点がありました。しかしながら検査項目7番の旅行キットでは、視覚的指示の工夫と言語指示によりダメーであるパウダーを入れずに自立してパッケージすることができました。間違いについては、自分で気づけば修正する力は見られました。途中、部品の汚れが気になったのか固まることがありました。
職業行動	検査者の反応を確認しながら作業に取り組む様子が見られました。促しがあると安心して作業を継続できることもあるようです。逆に慣れている袋詰め活動は、検査者がいないほうが生産性は高まるようです。 あまりスピードを意識していないため、生産性が落ちますが、根気強く取り組んでいます。部品等が足りないと、固まってしまい、促さないと改善しようという行為に至りませんでした。
自立機能	手を洗う、適切な飲食など日常生活動作でパターン化されているものは支援がなくてもできます。それでも何かこだわりがあったり、手順が違ったりすると動きが止まってしまうようです。
余暇スキル	興味がある活動(本をめくる)で余暇を過ごすことができます。本以外にはあまり興味は示しませんでした。 タイマーの音によって活動を切り替えることができていました。片付けもできていました。
機能的コミュニケーション	絵カードを使って一部の要求(お茶を飲みたい)を伝えることができていました。気持ちや体調の訴え、作業、課題場面では絵カードや、ジェスチャーの理解が必要のようです。
対人スキル	初めての人や場面ではあまり緊張がないようで、安定した気持ちで過ごすことができていました。不適切な行動も見られませんでした。こだわりが分からないですが、先述したように促しを必要として固まることがあります。 好ましくない対人行動を示すことはなく、笑顔で応えることができていました。
要約と推奨	直接観察尺度では、他の尺度に比べて合格項目が多かったです。このことから、本来は各領域のスキルを備えていることが分かります。検査場面では、検査者の様子が気になることから、過剰な関わりは控えたほうがよさそうであることが分かりました。 視覚的指示については、写真の指示に合わせて目の前でモデルを示し完成品があることで理解が進み遂行できるようでした。しかしながら、写真と実物が少しでも異なったり汚れが気になったりすると、作業が停滞する可能性も見られました。実物の汚れや大きさが異なると、写真と違うものとして見てしまうのかもしれませんが。そのような時、作業が止まって検査者の促しを必要とする様子から、自分から助けを求めることができるようにすること、何に困っているのかを伝える手段の確立が必要です。環境整備として今までの具体物や写真カードも少し抽象化したほうが効果的なのかもしれません。 以上のことから絵カードによる指示、モデルの提示、視覚的指示の工夫、コミュニケーション手段の確立は今後のサポートに必要な構造化といえるでしょう。 最後に、検査中トイレに行き、ズボンのファスナーを上げるところで1回目はスムーズだったものの、2回目は固まってしまうことがありました。促しても、なかなか行動に移せない様子でした。本人の中で手順が違っていたのか、次の活動が気になり見通しが持てなかったのか分かりませんでした。今後注意深く観察し、PECS等を使いながら自分が今何に困っているかを伝える効果的な手段を模索していく必要がありそうです。

表2 分析フォーム

機能領域	留意が必要な特定のスキル	目標のタイプ	
		指導目標	関連目標
職業スキル	旅行キットのパッケージングにおいて、実物大で陰のある視覚的指示書の方が戸惑うことなく作業が出来ていた。	視覚的指示書は、実物大であり、なおかつ抽象的な写真やイラストを使うことで作業自立を目指す。	
職業行動	部品等が足りないことは分かっているが、発信して何に困っているか伝えることが難しい。	分からない時や困った時の発信の練習の場を設け、コミュニケーションのきっかけとなるツールを活用する。	代替コミュニケーションツールを使ったやり取りの定着。
自立機能	すべきことが分かると、自分で移動する力がついてきています。スケジュールや日課表を提示し、カードを持って移動した場所のポケットに入れることで自立して生活できそうです。	カードを使って移動し、活動をする。	
余暇スキル	タイマーを使って活動を終えることができます。片付ける場所をカード等で提示しておくことで自分で片付けをした後、さらに次の活動場所に移動できそうです。	余暇の終了時にはタイマーを活用し、自分で片付けを行った後次の活動に移行する。	物と写真やイラストを一致し、物の移動をする。
機能的コミュニケーション	自分の気持ちを伝えることが困難。余暇の時間や、食事の時間等を使って、まずは欲しいものから絵カードで伝える練習をしていくと効果的かもしれません。「終わりました」の報告は事業所でも行っているので、適切なプロンプトがあると習得も早いでしょう。	代替コミュニケーションの練習をし、自立して使う。	本人が活用できる場面を増やす。
対人スキル	好ましい対人行動をとり、自己抑制も出ています。活動の後になって「イヤ」ということがあるようですので、その際は自分から落ち着けるようにカームダウンし、どの活動、何が嫌だったのかを聞いてあげるといいかもしれません。	「イヤ」ということを家庭以外でも伝える手段を身に付ける。	

3. 他の検査結果

S-M 社会生活能力検査の結果は、SA2-9 SQ21 (20XX年7月実施)。身辺自立、移動、作業、意思交換、集団参加、自己統制の6つの領域の中で作業の領域が最も高く、4歳5ヶ月の社会生活年齢であった。「缶ジュースのふたをとることができる」という項目がTTAPと一致しており、「ナイフなどの刃物を注意して扱える」や、「かなづちやドライバーなどが使える」が不合格になっていることもTTAPの結果と同様であった。また、意思交換が6つの領域中、最も低い1歳3ヶ月の社会生活年齢となっており、TTAPの「機能的コミュニケーション」が6つの領域で最も低い領域の一つであった結果とも一致した。

4. 関係者によるミーティングの開催

TTAP フォーマルアセスメント結果を保護者（保護者）と事業所関係者（施設長）に説明し、Aさんの特性や強みに関する共通理解を図った。その際、①合格（強み）、②芽生え（指導すれば獲得できるスキル）、③芽生えに対する支援や環境（具体的な支援方法や環境改善の提案）を中心に、最近の様子も含めて情報交換を行った。アセスメント結果の説明内容について表3に示す。

表3 アセスメント結果の説明内容

内 容	
合 格 (強 み)	<ul style="list-style-type: none"> ・組み立てや、分類等の簡単な作業ができる。 ・支援者がいなくても作業を継続することができる。 ・休憩時間を一人で過ごすことができる。
芽 生 え (指導すれば獲得できるスキル)	<ul style="list-style-type: none"> ・スケジュールと言葉かけがあれば、部屋の移動ができる。 ・促して練習することで休憩の要求を、絵カードで伝えることができる。 ・視覚指示書を見ながら、仕分け作業や袋詰めができるが、安定して活動ができないことがある。
支 援 法	<ul style="list-style-type: none"> ・スケジュールカードやイラストを持って移動する。 ・視覚指示のイラストや絵はモノクロのほうが有効。 ・ワークシステムを使って、「いつ」「なにを」「どれくらい」の見通しを持たせる。

(1) 保護者 (母親)

主に提案した3点について保護者のコメントも含めて示す。

1点目は、絵カードを用いる際、カラーよりもモノクロのほうが効果的であるという提案である。これに対して保護者は、「日常生活の中でも、色の識別能力が高いから同じ赤でも色の濃淡を見分けて、マッチングできないことがある」ということだった。視覚指示を出す際は、モノクロで多少抽象的な方法を使って支援をするよう提案した。

2点目は、活動中に止まってしまったときはすぐに次の活動を促すのではなく、本人が自ら動くことができる力の育成のために待てる状況のときは待つという提案である。保護者は「トイレの便座から立ち上がらないときは促すが、嫌だという意思表示があるので待っている」という回答であった。嫌だと言う意思表示がある場合はこれまでと同様に、できるだけ本人のペースで行うことができるように支援することを共通理解した。

3点目は、家庭での手伝いの場面で少し困った状況を作り、意思表出する場面を作り出すという点である。保護者は、「現在、『トイレでまだ便座に座っていたい』という動作や、『トイレにつばを吐きに行きたい』という指差し、後になって『活動が嫌だった』という首振りの意思表出はできている。今後は、意思表出の場面が増えてくれるといい」と、肯定的であった。

(2) 事業所

主に提案した3点について事業所職員のコメントも含めて示す。

1点目は、絵カードでの指示はカラーのイラストよりも、モノクロで抽象化したイラストの方が混乱なく作業や活動にとりかかることができるという点である。これに対しては、「余暇活動で、どの活動がいいか絵カードで選ぶようにしているが、使用している絵カードもモノクロのほうがいいのか」という質問を受けた。既存のカードで選ぶことができているのなら無理に変える必要はないことを伝えた。しかしながら、カードを選んだ際、2つの具体物を提示し、絵カードと同じ物を選ぶことができるのかアセスメントが必要だということは伝え、選ぶことができない時は絵カードの作り直しを検討した方がよいことを協議した。移動の際に自信を持って教室移動して席に着けるようにモノクロのカードを利用してはどうかという提案を行った。

2点目は、ワークシステムの導入である。「いつ」「何を」「どれくらい」の作業内容の見通しが持てることで自立して取り組むことができるという提案である。同時にスケジュールを活用することで1日の見通しを持つことができ、取り組めることが増える可能性がある。

3点目は自発的なコミュニケーションの促進である。これについては、「作業が終わったら、自分から作業が完了した作品を持ってくることもあるが、安定してできるわけではない」という話であった。「終わりましたカード」を使っているが安定して使うことができているということであった。自分から発信できるように、職員の余裕があるときに身体的プロンプトを示し、少しずつ介入を減らす提案を行った。

V. 考察

ハードスキル(作業スキルであり、具体的には清掃、食器洗い、学歴や資格等)の職業スキル領域だけでなく、

ソフトスキル（環境の把握，コミュニケーション発信の仕方，対人関係の中でのやりとりや情報理解等）として5つの機能領域（職業行動，自立機能，余暇スキル，機能的コミュニケーション，対人行動）のアセスメントができるツールであるTTAPを活用したことで，対象者の特性及び生活全般において獲得しているスキルと芽生えているスキルを把握することができた。

アセスメントの結果から，①簡単な作業なら一人で遂行できる，②見通しを持って生産活動や生活ができるように，スケジュールやワークシステムが有効であること，③視覚指示については，カラーで詳細なものより，モノクロで抽象的なイラストの方が混乱は少ないことが分かった。職業領域においては，ワークシステムや視覚指示を用いた環境整備をすることでより自立して生産活動に取り組めることが分かった。課題となったコミュニケーション面では，家庭及び事業所関係者と話をし，できるだけAさんから意思を発信できる場面を設定していくことや，そのためにAAC（拡大・代替コミュニケーション）の活用等の提案を行った。これらのアセスメント結果の報告と提案を行った関係者によるミーティング後のアンケート調査では，保護者からは「これからのビジョンが見えたような気がする」や，事業所からは「検査の結果を役立てることはありがたい」という肯定的な回答が得られた。

ここで本研究において就労後のアセスメントの意義とTTAPを活用した意義について3点述べる。

まず1点目は，現在の実態やライフサイクルに応じた課題の見直しと目標の設定をすることは，障害特性に合わせたサービスを提供する上で必要不可欠であることが分かったということである。保護者と事業所とのミーティングの中で，アセスメント結果と日常でのモニタリングの様子をお互い共有し，どんな課題がありどのような支援が有効なのかを議論することはAさんの現在と今後を考える上で非常に有意義だった。これは地域・家庭・教育機関の連携とも言える。直接観察・家庭・事業所の3つの異なった環境条件の尺度からアセスメントするTTAPだからこそ，このような情報提供ができたと考える。そうした各環境の中でのAさんの強みや課題を把握することができるTTAPは，各機関の連携を促し，目標や支援内容の共通理解を促進するツールとなったと言える。

2点目は，認知特性を明らかにし広範囲の生活課題を捉えなおすことにより，今後の生活介護サービスを継続利用する上で，どのような活動が好きで，日常生活や作業課題において自立的に取り組めるようにするにはどのようなすればよいか等の支援の協議をより深めることができたことである。これはAさんのQOLの向上につながるかと考える。厚生労働省大臣官房障害保健福祉部が公表した「障害者児施設のサービス評価基準」は，個人が尊厳をもって，その人らしい自立した生活が送れるように支える理念を掲げている。人権の尊重を重視して作成されており，5点の基本的な考え方が示されている。その中に，「生活の質(QOL)の保障及び向上」が述べられており，障害者一人一人が自分自身の生きがいを見つけ，働きながら生活を楽しむことができることを目指したスキル学習やサポート内容の充実等が求められている。そのために，Aさんの現在の作業能力及び生活全般における6領域生活課題を独自の採点システムである「芽生え」で課題の情報を提供できたことは効果的であった。指導を行えば習得できる可能性がある項目が明らかになることは，家庭及び事業関係者にとって共通の課題認識を持って連携ができやすくなると共に，事業所にとっても職員間の課題と支援の共通理解にも活用できると考える。

3点目は，環境因子のアセスメントをすることは障害の状態理解について共通理解ができるという点である。2001年5月に世界保健機関(WHO)総会においてICF(International Classification of Functioning, Disability and Health)が採択された。服巻(2018)は，「ICFは環境因子という観点を加え，障害を有する人のバリアフリー状況や福祉サービス等の環境調整をも評価し，社会システムやその人の補助具としてのテクノロジーを含めた技術の改革・発展を取り入れた生活状況の改善を促すことを含めた社会モデルによる『適応』の考え方が強調された」と述べている。障害の多様化が進む中，環境整備のアセスメントがさらに重要になったと言える。TTAPでは直接観察の様子や結果から環境調整の提案である「構造化による支援方法の提案」を行うことができる。これを共通理解することで，家族や事業所は支援を行う際に必要な環境設定を知ることができ，よりAさんの自立度を高めることができる。

最後に今後の課題を述べる。本研究で得られた結果は，一人の対象者のみで行われた単一の事例であり，この結果からTTAPが就労後のアセスメントに効果的であるとする結論を述べることはできない。また，アセスメントの実施と提案，その後のミーティングの記録であり，アセスメント結果からの課題設定や環境調整，変容観察を行う必要がある。そうすることで，就労後のアセスメントの必要性について深い理解と実現につながっていくだろう。

文 献

- 岡田祐樹・日詰正文・古屋和彦, 都道府県・政令指定都市・中核都市における生活介護・就労継続支援 B 型事業所の評価についての実態調査, 国立のぞみの園紀要, 0 巻・12号, 2019, 29-38
- 厚生労働省: 障害者対策基本方針, 2019, 1-18
- 厚生労働省: 自己点検チェックのための生活介護事業ガイドライン案, 2019, 1-23
- 厚生労働省: 就労アセスメントを活用した障害者の就労支援マニュアル, 2015, 1-28 (2020年 7 月 4 日閲覧)
- 梅永雄二, 自閉症スペクトラムの移行アセスメントプロフィール―TTAP の実際, 川島書店, 2010, 1-255
- 梅永雄二・服巻智子, TTAP 実践マニュアル, ASD ヴィレッジ出版, 2018, 1-175
- 梅永雄二・服巻智子, 副読本: TTAP, ASD ヴィレッジ出版, 2014, 1-128

A Case Study of Assessment for Persons with Intellectual Disabilities Using Daily Life Care Business - Using TTAP(TEACCH Transition Assessment Profile) -

OZEKI Miwa* and TANAKA Kazuya**

This study conducted an intervention from grasping the actual condition of adults with intellectual disabilities to suggesting support goals using TTAP(Transition Assessment Profile), which is a comprehensive assessment for employment transition that incorporates disability characteristics and merits. It is a report. The current situation of the subject was grasped from the three environmental conditions, that is, the scale using inspection tools, the scale for hearing from parents, and the scale for hearing from business establishments to be used. As a result, it was inferred that not only the target children were visually dominant, but also black and white illustrations were easier to understand than color illustrations. This may be one of the causes of sudden stop of the behavior of the subject and occasional irritability that appears in daily life. We created a support target sheet according to the current situation from the obtained information, and proposed it as a tool for reviewing guidance and support and exchanging information between homes and business establishments.

*Early Childhood and Special Needs Education, Naruto University of Education

**Graduate School of Education, Naruto University of Education